

無量壽

第十四号 (二〇一五年十月号)
発行 雲夢山壽命寺



秋の雲と壽命寺の大屋根のシルエット。北斎の赤富士が連想されます。(2015/09/12 住職撮影)

お天気の落ち着かなかった九月を経て、気づけば十月。予てから準備をしてきた標題の法要がいよいよ間近となりました。

二日間でお勤めする四つの法要。それぞれの法要の趣旨は、それぞれの法要名が示す通りです。でも、それらは別々のものではなく、根底で繋がっていると言えます。

私達の宗祖、親鸞聖人がご往生されたのがおよそ七十五年前。それから約三百五十年後、この雄琴の地に生まれた壽命寺です。そこは親鸞聖人がお説きになったみ教えを、地域の仲間と共に聴き、共にお念仏をするための「道場」でした。

10/24

壽命寺第二十一世住職継職奉告法要

10/25

壽命寺開基四百年記念法要
親鸞聖人七百五十回大遠忌法要
親鸞聖人報恩講

爾来四百年、先人たちの思いも及ばぬご苦労によって壽命寺は今日まで引き継がれ、今日も変わらずお念仏の道場であり続けています。

そしておよそ五年前、新しい住職家として私達家族が迎え入れられました。そこには四百年護られてきたこのお寺の灯しびを、絶やさず次代に引き継ぐという意味が込められている。私はそう受け取っています。

壽命寺を引き継ぐということは、突き詰めれば親鸞聖人のお念仏のみ教えを伝えていくことに他なりません。こうした想いを胸に、各法要ともしっかりとお勤めさせていただきたいと思えます。

ご門徒の皆様も、次代に引き継ぐためにご家族でお参りください。

職話 住法

煩惱にまなこさへられて 摂取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

親鸞聖人「高僧和讃」

これは今般の音楽法要でもお勤め
するご和讃です。正信偈の「煩惱障
眼雖不見 大悲無倦常照我」の部分
と同じ内容です。「摂取の光明」と

は阿弥陀如来の救いの光、「大悲」

とは阿弥陀如来の無限のお慈悲、「も
のうきことなくて」とは「倦(あき)
るこなく」ということです。通し
て言えば「私達は自らの煩惱に遮ら
れて阿弥陀如来のお救いの光を見る
ことはできない。それでも如来は大
きなお慈悲の心で、一時も絶えるこ
となく私のことを照らしてください
ている」という意味です。

ところで親鸞聖人は阿弥陀如来の
お心を「大悲」と仰ぐ一方、自らを
「小慈小悲もなき身」と省みられて
います。慈悲とは平たく言えば自分
以外の誰かの幸せを願う心のこと。
だから聖人がこんな風に言うのを聞
くと謙遜されてるのかな、と思つて
しまいます。でもこれは表面的な謙
遜などではありません。もっと深い
お心から出たお言葉です。

ちょうど一年ほど前、我が子の保
育園の運動会のことです。その日
私は組内寺院の報恩講、坊守は仏

婦の境内清掃で二人とも運動会に参
加できないため、坊守のお母さんに
来てもらい、代役をお願いしていま
した。

ところが当日、事情を聞いた仏婦
の皆さんの計らいで、急遽坊守は運
動会に行けることに。慌てたのは私
です。お参りの時間が迫る中、坊守
を車で保育園へ送ることになったか
らです。気が焦り、いつもよりきつ
い口調で坊守を急かし、当時〇歳の
下の子と荷物を車に載せて保育園ま
で車を走らせました。

保育園まで来ると坊守は一旦駐車
場に車を入れるように言います。で
も焦る私はそれを無視し、車を路上
で停めて坊守に急いで降りるように
指示しました。一方的な私の態度に
流石に坊守も頭に来ていたようでし
たが、私の強い口調に気圧される格
好でしぶしぶ助手席を降りました。
そして彼女がドアを締めたその瞬間
：なんと私は車を発進させてしまつ
たのです。下の子や荷物がまだ車に
載ったままであることもすっかり忘
れて！

幸いミラーに走って追いかけてく

る坊守の姿が見えて、車を停めるこ
とができましたが、当然坊守は怒り
心頭、大声で私を罵っています。私
の方も逆ギレ状態で「時間がないの
に無理をいうからこうなるんだ！」
と言い返します。保育園の先生や保
護者さんの面前ということも憚ら
ず、その時は坊守が許せない一心で
喚き散らしていました。

その場をあとにして、目的地のお
寺に到着しても、私はまだ怒り続け
ていました。そんな状態で客殿の上
がらせてもらい、座布団に座って、
ふと顔を上げると、眼前の壁に額に
入れられた書がかかっていました。
そこには「大悲無倦」とありました。
「あ」と小さく唸りました。そし
てようやく、数十分前の自分の非を
悟りました。

皆さんにどう見られているかは分
かりませんが、私は普段から良い夫、
良い父であろうと心がけています。
家事も手伝いますし子供の相手もよ
くしているつもりです。そして何よ
り家族の幸せを心から願っているつ
もりです。そう、その意味では「小
慈小悲」くらいは持ち合わせている

気でした。

ところが、です。時間が迫ってい
るというだけで、坊守にきつさと車
を降りろと鬼の形相で怒鳴り、我が
子のことでも忘れ車を発進させる。そ
れが私の本性でした。なるほど聖人
の仰る通り、「小慈小悲もなき身」
だなと思ひ至り、恥ずかしく、情け
ない気持ちになりました。

けれども同時に、嬉しい心持ちに
もなりました。私はその時自身の非
に気付くことができたのは、他でも
ない阿弥陀如来の「ものうきことな
き」大悲が私に至り届いたからだ
とだけだからです。

私は自分の都合だけで怒ったり、
偽物の慈悲で優しくしたり、毎日身
勝手に生きています。でも私がどこ
で何をしようかと、阿弥陀如来は
ずっと途切れることなく私を照らし
続けてくださっている。だからこそ、
身勝手な私がふとしたタイミングで
そのお光に気づかせていただくこと
ができた。そう思えたのです。

報恩講のあと、坊守と子らを保育
園に迎えに行きました。開口一番「ご
めん」と謝りました。すると坊守は
「私も言い過ぎた」と言ってくれま
した。

阿弥陀如来のお慈悲の中、今日も
私たちはなんとか夫婦として、家族
として過ごさせていたただいていま
す。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。